

日本海溝陸側斜面域の堆積物の特徴 -NT15-07 航海報告-

○新井和乃・金松敏也・吉河秀郎・富士原敏也（海洋研究開発機構）

日本海溝沿いにおける 2011 年東北地方太平洋沖地震に伴うイベント堆積物の分布や過去の地震・津波履歴を復元するため、2015 年 4 月に実施された NT15-07 航海において日本海溝斜面域でピストンコアラーを用いた海底堆積物採取を行った。採取地点は、北緯 36 度 8 分から 39 度 22 分、水深 3800-6250 m の範囲で、海溝斜面の mid-slope terrace に発達する小型海盆において 4 地点（PC03-PC06）で実施した（図 1）。

採取した海底堆積物は主として珪藻質シルト～粘土からなり、1-5 mm 程度の粗粒層（粗粒シルト～砂）を複数枚挟在する（図 2）。粗粒層の挟在頻度は地点によって大きく異なり、少ないもので 1-2 枚/m（PC04）、多いもので 7 枚/m（PC03）である。北側・水深の浅い地点では粗粒層は少なく、南側（特に北緯 38 度付近）・水深の深い地点では多い傾向がみられる。また、シルト～粘土層は暗オリーブもしくはオリーブ黒色の層と灰～灰オリーブ色の層の互層になっており、地震に伴うイベントだけでなく、環境変動の影響も記録している可能性が考えられる。

今後、これらの堆積物の特徴の成因を明らかにするために、Core Color データや堆積物組成等を詳細に検討する予定である。

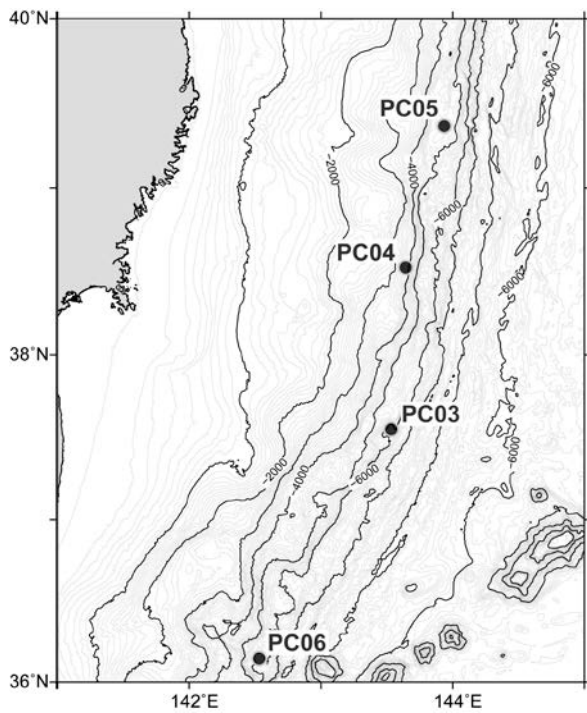


図 1 海底堆積物の採取地点

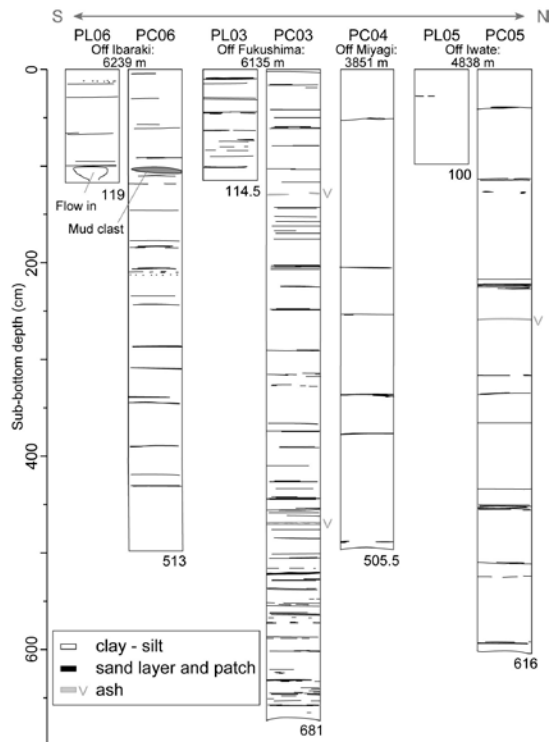


図 2 各コアの岩相